

緒 言

菊地臣一

福島県立医科大学理事兼学長 整形外科

医療界は、今、未曾有の激動期の中にある。卒前・卒後教育の見直し、国民皆保険制度崩壊の予兆、国民の求めるニーズの高度化と多様化、そして地方における医療崩壊など、枚挙に暇がない。これらの問題の解決に対しては、包括的な議論による、一体となった解決策の構築しかない。一刻も早く、政府は「問題対応型」でなく、「問題設定型」の議論と対応により抜本的な立て直し策の策定に乗り出す必要がある。ただ、わが国ではそのために必要な情報が入手できないし、あっても公表はされていない。その結果、国民的議論や海外との比較の前提になる「情報の共有化」がなされていない。

整形外科という診療科自体も、今、岐路に立っている。西洋医学が明治時代の初頭に導入されて以来、先人達は、整形外科の専門性の確立と同時に、その守備範囲を広くすることに努力してきた。その結果、わが国における整形外科は、海外には類をみない独自の、そして巨大なプロ集団を構成するようになった。その内容は、運動器に関してのプライマリケアから専門医療まで、運動器の器質・機能障害に対する一貫した診療体制である。すなわち、運動器の外傷や疾患の予防、保存療法、手術療法、そしてリハビリテーションまでを担当しているのである。領域別にみても、骨や関節の外科や外傷はもちろん、関節リウマチ、痛風、骨代謝、骨・軟部腫瘍、スポーツ医学、脊椎・脊髄外科、リハビリテーション医学までを守備範囲としている。

診断・治療に対する考え方も、国民の医療に対する意識の変化に応じて劇的に変わった。それは、視点の転換である。すなわち、「信頼の医療」から「契約の医療」へ、「客観的な評価」から「主観的な評価」へ、「医療提供側の評価」から「患者の視点からの評価も」へ、そして「費用対効果への配慮」である。

医療の変革期である今という時代、今まで通り、わが国の整形外科の隆盛を維持するためには、整形外科医自身が変わらなければならない。「手術もできる運動器のプロ」として、これからも国民から信頼してもらうにはどうしたらよいか、今選択の分岐点に立っている。今まで通りの役割を果たし続けるのか、あるいは欧米型の整形外科に転換していくのかである。

今まで通りの役割を果たすのであれば、各領域において国民の満足が得られる医療の提供が求められる。NBMの重要性への再認識とそのknow-howの獲得は必須である。浅く広くという従来のやり方では、国民は納得しない。当然、専門医教育や生涯教育の教程を根本的に変える必要がある。もちろん、欧米の整形外科の雑誌やシステムをそのまま踏襲しているような今のやり方は通用しない。なぜなら、わが国の整形外科と欧米のそれとは別物だからである。一方、欧米型に転換するなら、手術が治療の主体となる。したがって、施設の集約化は避けて通れない。もちろん、手術は整形外科の各領域の専門医を揃えるチーム構成となる。

混迷の時代、迷った時は原点に立てばよいのである。原点は、われわれの診療を受けてそれを評価する国民にある。国民に信頼されるには、われわれの自己研鑽と自己規制、そして社会貢献の大きさを黙々と提示し続けることである。

この誌上シンポジウムは、整形外科の未来を考える格好の材料を提供してくれている。

本特集は第82回日本整形外科学会学術総会(会長：岩本幸英 九州大学教授)における同名のシンポジウムを再構成したものである。